

図書館だより

北海学園大学附属図書館報 第26巻4号(通巻172号) 2005.1.21

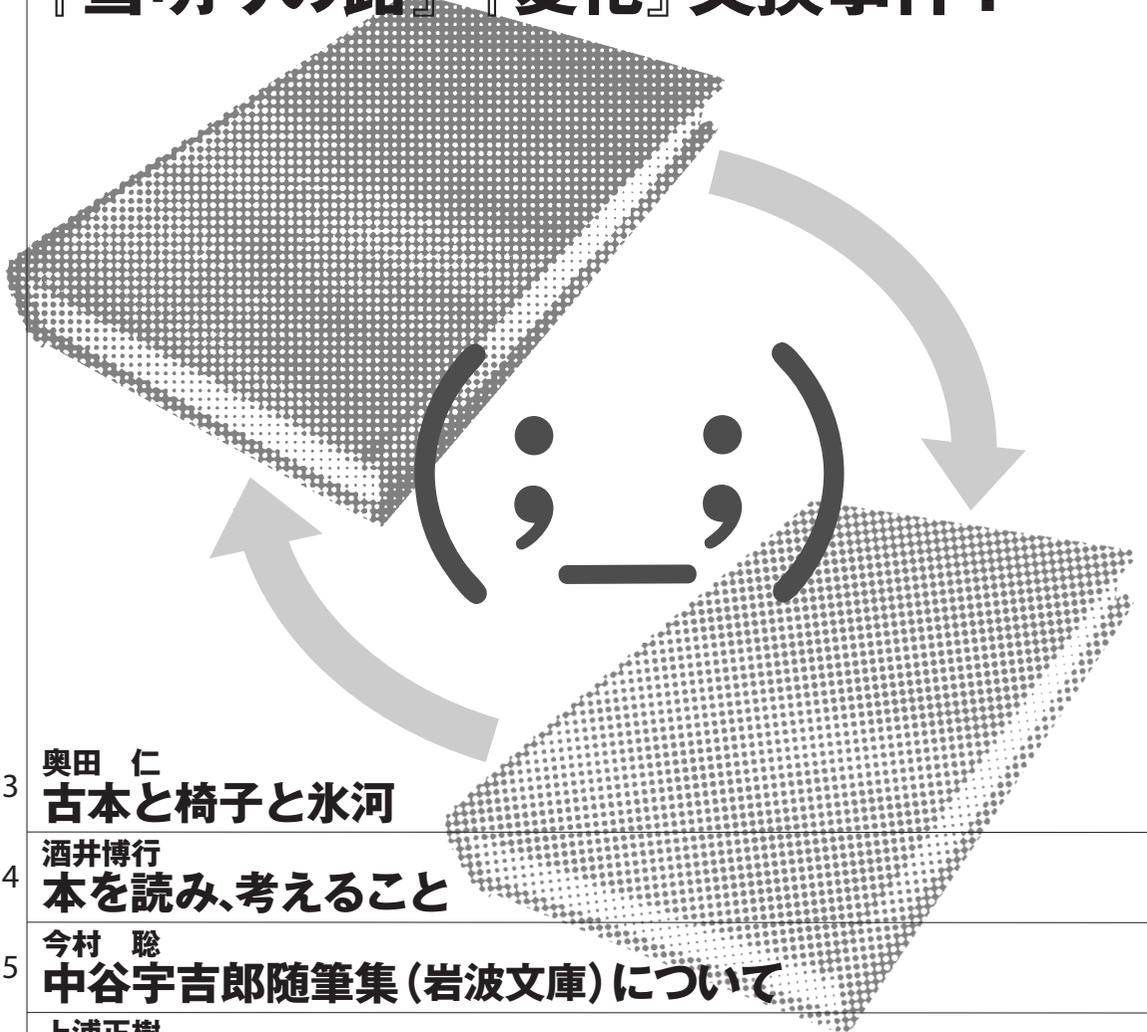
vol.26

NO.4

Bulletin of the Hokkai-Gakuen University Library

野坂幸弘

2 『雪明りの路』・『夏花』交換事件？



奥田 仁

3 古本と椅子と氷河

酒井博行

4 本を読み、考えること

今村 聡

5 中谷宇吉郎随筆集(岩波文庫)について

上浦正樹

6 自分を制御する

7 図書館利用のポイント、お知らせ

8 大学図書館相互利用サービスのご案内

社会環境と地震・防災展

編集後記

『雪明りの路』 『夏花』 交換事件？

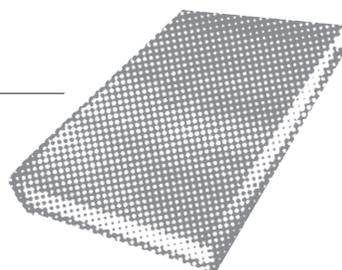
文＝野坂幸弘

(のさか ゆきひろ／人文学部教授)

本に話題を限っても、あれはやめておけばよかったと後になって悔いたり、貸したまま戻って来ていないものがあることに腹を立てたり、所在がわからなくなっているのに、たしかに持っていたはずだと一晩中探したりするような経験は誰にもあることだろう。私の場合、なかでも尾を引いているのは昭和45年秋の『雪明りの路』・『夏花』交換事件？である。念のために書いておけば、『雪明りの路』は伊藤整の第一詩集（大正15年刊）、『夏花』は伊東静雄の第二詩集（昭和15年刊）である。

◆◆◆

私は蒐書家などと言えるような存在ではまったくないが、研究者の端くれであるから、書物に関する興味は当然あるし、必要なものはそれなりに集めている。私が年来おもな研究対象にしているのは伊藤整であるが、最初のうちは全集（河出書房版）が完備したものではなかったせいで、単行本を古書店で探し廻らざるを得なかった。大学院学生の頃から十年ほどかかって、伊藤整の著書（短篇小説集・長編小説・評論集・随筆・翻訳等六十点余り、文庫版・新書版を含めるともっと多くなる）のほとんどを入手したわけであるが（昭和30年代、40年代の小樽や札幌の古書店ではまだそれが可能だった）、そのおおくは初版本である。これは伊藤整という文学者



がその生涯の

一時期を除いて、あまり本が売れない存在であったために、版を重ねることがなかったということの意味する。しかしというかだからというか、重要な著作の何点かはいまだに手に入れていない。詩集『雪明りの路』・『冬夜』（昭和12年刊行の第二詩集）の二つもそうである。

欠けているもののほかにも、当然ほかの本も必要だから古書店を歩き廻り、それが日課のようになっていた。そんな中で伊東静雄の『夏花』（伊東ファンならずとも垂涎の書だ）も入手した。これは札幌はススキノ近くのS堂で偶々見つけたのであるが、何くわぬ顔を装おうとする私に対する仏頂面の店主の表情が嬉しかった。初版でたしか七百円か八百円だったのだから。

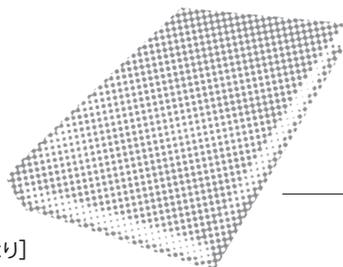
◆◆◆

昭和45年の秋、私は岩手の大学に職を得て盛岡に移り住むことになったのであるが、事件？は赴任してすぐに起こった。卒業学年の学生で、論文で伊東静雄を対象にしているというA君（明るい好青年の彼とは音信が途絶えてしまっているが、宮城県で高等学校の教師をしている）ほか初対面の何人かと飲みながら話しているうちに本の話でもでてくる。はずみで私は『夏花』を持っていると自慢げに話す。すると彼は『雪明りの路』（復刻版）をもっていると負けずという。会話の詳細は定かではないが、あっという間に引つ込みがつかなくなったその場の雰囲気はいまなお覚えている。結論的に、私の『夏花』（初版）とA君所有の『雪明りの路』（復刻版）を交換するということになってしまったのであった。この復刻版シリーズは後に古書店でもばら売りされるようになったから入手の可能性が強いが、セットで売り出されたばかりの当時はそうではなかったのである。

この交換にはもちろんいろいろな感想があるが、はっきりと言えることは、以来三十数年間、『雪明りの路』（復刻版）が私の研究に直接的に役立ったことはないということである。

◆◆◆

稀覯本をめぐる、しばしば殺人事件が起きる欧米ミステリのような世界では、そもそも初版本と復刻版を交換するなどということはいりえないことだろう。事件？とした由縁である。



古本と椅子と氷河

文＝奥田 仁

(おくだ ひろし／経済学部教授)

ノルウェーは氷河とフィヨルドの国として有名であるが、次に紹介する二つの小さな町も共にフィヨルドのほとりにあり背後に氷河を控えている。

私が家具というものに興味を持ち始めたのは30年ほど前、旭川を訪れて市の工芸指導所の人から熱っぽい説明を聞き、いくつかの工場を見学して、若々しい躍進期の旭川家具産業に強い印象を覚えたときからである。以来、それほど深くではないが、折に触れて地域産業としての家具産業に関心を寄せてきた。

そうした中で、ノルウェーのAlesundで開かれたISSMRという学会に参加した折のエクスカージョンでEkornesという会社を訪れる機会を持った。そこで最初に見せられたプレゼンテーションフィルムの冒頭は何と富士山であった。そこにいた日本人は私一人だったから、意識してこのようなフィルムを見せたわけではない。1934年創業のEkornes社は、ノルウェーから出発してヨーロッパ市場、アメリカ市場に続いて現在日本市場の開拓を狙っていたところだったのである。帰国後、時折家具屋を覗くと、この椅子があちこちの展示場に姿を現すようになってきている。もちろん日本の悪習で、安価な模倣商品も出回っているが…。こうしてEkornes社の売り上げは1994年に約5億クローネ（約75億円）から2003年には約20億クローネ（約300億円）に躍進している。



Ekornesのパンフより

このEkornes社が立地するのが下の地図に示したlkornnesという小さな集落である。

lkornnesは行政区画的にはSykkylvenという人口7000人ほどの自治体に属し、その中心市街からフィヨルドを隔てた人口700人ほどの小さな集落であり、首都オスロからはほぼ300キロ離れている。



ここで印象的だったのは、「自分たちはヨーロッパの経済中心から遠く離れた小さな町で、原料は輸入（木材はフィンランド、皮革はアルゼンチン）、生産しているのはいわゆるハイテク先端産業製品ではなく、しかも賃金は世界一高い（法定最低賃金で1300円ぐらい）、それでもなお世界に輸出してこれだけ業績を伸ばしている。」と語ったときの、自信と誇りであった。

もう一つはSogndalという自治体に属するFjorlandという地域で、この中心はMundalという集落であるが、かつての米国の副大統領で駐日大使を勤めたモンデル氏の祖先の出身地である。ここはウェールズのHay-on-Wyeという町を起点にして国際的に広がっているBook Townsの運動に参加し、現在たった400人の人口に対して、12軒の古書店が20万冊の本を展示している。田舎の小さな町が書籍文化の発展に寄与しながら観光客を引き付け、町おこしをしようというこの運動は、やはり地方の行き方に重要な示唆を与えているように思えた。

この2つに共通しているのは、人口数百人の辺鄙な土地で世界を見据えた町おこしが行われているということである。逆に言えば、数百人が知恵を出し合えば、60億の人々が住む世界に向けて発信する町づくりをするのに十分であると考えられることのできるのである。

本を読み、考えること

文＝酒井博行

(さかい ひろゆき／法学部講師)

私の出身地、九州の北端、門司港と鹿児島とを結ぶJR鹿児島本線の列車が熊本県八代(やつしろ)を過ぎてしばらくすると、遠くに天草の島々を望む不知火海(しらぬいかい)の海岸線沿いを走り、熊本県の南端、水俣へと到着する。改めていうまでもなく、この地は、我が国における四大公害病として有名な水俣病事件の主な舞台となった地である。この地で操業していた(現在も操業しているのだから)チツソの工場から不知火海に排出された工場排水中の有機水銀を魚介類を介して摂取した人たちや、母親の胎内で母体を通じて有機水銀を摂取した胎児たちが、脳や神経に重い障害を負い、命を奪われたのである。中でも、不知火海での漁で生計を立て、不知火海の魚を常食としていた漁民に患者が多く存在した。彼らは、水俣病によって、自らの生命・身体のみならず、漁による生計、そして、不知火海の美しい海をも奪われたのである。

このような水俣病患者の苦しみや思い、そして、美しい海やそこでの生活が奪われたことへの悲しみを、患者への取材を通じて克明に描いたのが、石牟礼道子著『苦海浄土』(講談社文庫)である。石牟礼氏は、水俣で主婦として生活をおくられていたのであるが、水俣病患者の人たちと接し、この作品を書き、後には水俣病患者を支援する運動にも携わっていくことになるのである。私は学生時代、ふとしたきっかけでこの本を知り、読んでみた。それまでも水俣病の存在自体は学校の授業などで知っていたが、この本を読むことで、改めて、水俣病患者の人たちの思い、苦しみ、そして、不知火海での貧しいながらも平和な生活が破壊されたこと

への悲しみを知ることになったのである。このことがきっかけとなって、私は水俣病に関心を持つようになり、実際に水俣にも行ってみた。

水俣という町は、チツソの工場とともに発展した企業城下町であり、チツソと何らかのつながりのある住民も多い。水俣病患者の人たちが救済を求めて訴訟を提起すると、彼らが「チツソに歯向かう者」であるとして、様々な中傷も飛び交うようになった。このような形で、水俣病は患者の生命、身体、生活を傷ついただけでなく、地域社会にも深い傷を残したのである。私はこのような事実を、水俣にある資料館で知ったのであるが、これらの事実、そして、石牟礼氏の著書で知ったことは、私にいろいろなことを考えさせるきっかけとなったのである。我々が経済成長によって豊かな生活を送っている裏側で、多くの人が命や健康、そしてかけがえのない生活を奪われ、また、地域社会も危機に瀕した。このことをどう考えるべきなのか…。

現在の私は、民事訴訟法の教師となり、水俣病を直接の研究・教育の対象としているわけではないが、学生時代に本を読み、現地にも行き、いろいろと考えたことは、決して無駄ではなかったと思っている。人様に誇れるほどの読書歴を持っているわけではない私だが、このことは実感として思っている。学生の皆さんも、1冊でもいい、何か生涯大事にしうるような本を見つけ、読み、そこから何かを考えてもらいたいと思う。そのことが、将来何をするのにしても、何らかの糧になるのではないかとと思う。一見耳あたりはいいが、その実は浅薄で、とすれば他人を傷つけかねないような「痴性」が蔓延する今だからこそ…。



中谷宇吉郎随筆集(岩波文庫)について

文= 今村 聡

(いまむら さとし/経営学部助教授)

「本棚を覗かれるのは、頭の中身を見透かされるようで、散らかしっぱなしの私室に入られるよりも恥ずかしい」と言った人があったが、小生も同感で、毎年受験生にお配りしている『大学案内』に「高校生・受験生にお勧めする一冊を挙げよ」と言われては困っているのだが、最近では樋口敬二編『中谷宇吉郎随筆集』(岩波文庫)でお茶を濁している。

中谷宇吉郎(1900—1962)は石川県に生まれ、東京大学理学部物理学科で寺田寅彦の指導を受けて卒業、理化学研究所を経てイギリスに留学、1930年、北海道大学理学部の創設に当たって助教授として札幌に赴任、1932年に教授となった。もちろん小生には中谷の研究の中身は理解できないが、有名な雪の結晶と人口雪の研究のほか、凍上、永久凍土、霧、着氷、水資源、グリーンランドの積雪等の雪氷に関する研究により、「低温科学の開拓者」と呼ばれた。

本随筆集は、編者の樋口教授による「さまざまな選択があり得たが、結局、思い切って編者の好きな作品を選ばせていただくことにした」との方針のもと、I中谷の雪の研究に関するもの、II中谷の自伝的な作品、III中谷の恩師である寺田寅彦の思い出、IV「科学的な考え方とはどんなものであるかということ」を教えるもの、の4部で構成されている。

Iの雪の研究に関する随筆は、結晶に関する専門用語が多く、小生には理解できないところもあるが、昭和初め頃の北海道の山の様子が興味深く描かれている。

IIでは、第2次大戦中、苫小牧の飛行場の滑走路上の夏の高霧を消すために石油を燃やした熱気を空気に混ぜて送風機で送り出す実験をしていたところ、エンジンと送風機をつなぐベルトが手に入らずに苦労していた一方で、イギリスでは同じ原理の装置がすでに実用化されていたとか、原子爆弾の開発にアメリカが20億ドルの開発費と6万5千人を超える

人員を投入していたとき、日本に作られた原子核崩壊の研究委員会の優秀な物理学者が、関係官庁のお偉いさんの所へわざわざ要求に向いたものが、わずかに真鍮棒一本だったとか…と並べてゆくと、「だから日本は」みたいな論になりそうだが、中谷が訴えているのは、一般の人々の科学(中谷の言う「健全なる常識」)に対する理解である。

IIIは、中谷の恩師で随筆家としても名高かった寺田寅彦の思い出であり、やはり寺田が指導していた実験についてはよくわからないけれども、寺田が「僕の一生は何もしなかったかも知れないが、ただ一つだけ安心していえることがある。それはこうと見当を付けた事は大概はずれなかったということだ」と述べたことや、銀座の果物屋で普段のランチの倍の値段のメロンを食べたとき、中谷がこういう高貴なものは、皮のぎりぎりまで食べるものではないと思ってまだ柔らかい部分を残したら、寺田に「君たちは、メロンは嫌いですか」と訊かれたことなど、ここだけ抜き出しても面白くも何ともないが、中谷が描くと素晴らしいものとなる。

IVの中の「地球の丸い話」では、地球の直径1万3千kmを、直径6cmに圧縮して線の幅0.2mmの円を書くと、エヴェレストもエムデン海溝も、また地球の赤道面の半径と南北方向の半径の違いも、すべて直径6cmの円の線の幅0.2mmの中に入ってしまうという話から始まって、物理で使う線には幅があるという具合に展開して有効数字に及ぶ。

下手な紹介はここでやめるべきであろう。このほか中谷宇吉郎には12冊の随筆集があり、また岩波書店より『中谷宇吉郎集』8巻(本学図書館工学部分室蔵)が刊行されているので、まずは御一読願いたい。

自分を制御する

文＝上浦正樹

(かみうら まさき/工学部教授)

この秋に発生した新潟県中越地震において新幹線が脱線したという情報は鉄道関係者に大きなショックを与えました。超高速で走る新幹線では2重にも3重にも安全設備が施され、その結果1964年の開業以来、営業線での脱線は0でありました。最近の激甚災害に指定されるほどの規模の地震に阪神大震災がありますが、幸いなことに明け方でまだ、新幹線の始発が発車する前でしたので今回のような脱線の事象はありませんでした。私は阪神大地震直後に召集された鉄道の早期復旧工法の対策委員会へJRの一員として参加しましたが、在来線で走行中の列車が4本あったが脱線は免れたとの情報を聞き、地震に対する構造物の基準を見直す必要に迫られているなかでレール・車輪フランジ機構の優秀性を改めて認識したものでした。それ以来、漠然と地震に走行する車両は脱線しないものと考えていましたので、新幹線の脱線のニュースには、にわかには信じられない思いがありました。(今から言えば震源地に近くあれほどの揺れでは当然との感じもするのですか)とはいえ、脱線しない車両で2km近くを走行したことからしてレール・車輪フランジ機構が十分に役目を果たしていることに安心しました。

このレール・車輪フランジ機構とは車輪がレールの外側へはみ出さないように2本あるレールに接する車輪の内側につば状の突起をつけたものです。つまり、走行するものが自身で走行を制御する機構を有していることとなります。この突起の高さは新幹線ではわずか3cmですし、世界のどの鉄道もほぼ同じです、この程度の突起で

脱線せずに毎日列車は動いています。

このようなシステムのみみ出された経緯には諸説があります。しかし、大雑把に言って次のようなことだと思えます。原始の時代に道具の発達によって丸太を使ったコロが発明され、最小限2つのコロによる車ができました。ローマ帝国の場合には、石畳で舗装された軍用道路を、馬の引く重戦車が轟音をたてて駆け抜けていったといわれていますが、できたわだちがヒントとなって凹型の溝型走行路ができたと思われま

す。この凹型の走行路は、車輪に対して無駄な動きを制限する役目と途中から別の方向に行かないように走行を保持する役目つまり、外部から走行を制御する役目を負っています。炭鉱の発掘や石炭の搬出など凹の走行路が活躍しましたが、短い距離では機能していても曲線部や敷設の精度を確保するのが難しいなど支障が多く見られるようになりました。

そこで逆転の発想から車輪にガイドを付けたのがフランジ付車輪です。つまり、車輪自身が走行を制御する仕組みです。それ以後、蒸気機関車が発明されてから現在に至る約200年もの間でもこの構造は変化せずに保たれています。仮にフランジの発明がなく鉄道がそれまでの凹型の溝による走行路だとすると、時速300kmの走行は不可能であつたでしょうし、現在の新幹線網のように国土全体の交通ネットワークの主流になれなかつたかもしれませぬ。私は自己制御型でわずか3cmのフランジが鉄道の敷設を容易にし、普及する原動力の一つになったことを知ったとき、本学の図書館で読んだ本のことを思い出しました。そこには、明治末期から大正初期にかけて初めてチベットに入り、日本でのチベット仏教の先覚者である河口慧海が述べた言葉がありました。「この地上を全部牛の皮で覆うならば、自由にどこへでも跣足(はだし)で歩ける。が、それは不可能である。しかし、自分の足に七寸の靴をはけば、世界中を皮で覆うのと同じことである。」



車輪断面

フランジ

図書館利用のポイント

レファレンス・サービス

大学図書館を十分活用していただくために、レファレンス・サービス（参考調査）係では、教育支援の立場に立ち、以下のサービスを行なっております。ご利用の方は、**本館2階閲覧室グランド側レファレンス・カウンター**を、**工学部図書室はサービス・カウンター**をお尋ねください。

- ① 図書館の利用方法について知りたい。
- ② 求めている文献・資料がどこの図書館に所蔵しているか知りたい。
- ③ 本学図書館で所蔵していない資料を他図書館との相互協力によって「文献複写依頼」「図書貸借依頼」「図書館利用願の発行」などの方法で利用したい。

レファレンスの利用方法

① 受付

- ① 必ず、下の③「文献検索ツール」を参照して、事前調査をし、得られた情報を申込用紙にご記入ください。
- ② 情報が得られない場合には、求めている資料が引用されている資料かコピーを提示してください。
- ③ ご希望の資料が他の図書館にある場合には、その図書館を直接利用することもできますので、係員までお申し出ください。
- ④ 他館からの取り寄せの費用は、有料となります。

② 連絡・閲覧

ご依頼に対しての回答および資料の到着の連絡は、適時行ないます。連絡先を明確にしてください。
また、期限のあるもの（相互貸借図書など）については、ご利用は期限日をもって終了させていただきます。
なお、期限の延長はしません。

③ 文献検索ツール

- ① 本学図書館の所蔵調査（公開検索=OPACでの検索）…………… URL : <http://library.hokkai-s-u.ac.jp>
もしくは図書館2F閲覧室のOPAC用PC
- ② 他大学図書館等の所蔵調査（Nacsis Webcat）…………… URL : <http://webcat.nii.ac.jp>
- ③ 国立国会図書館の所蔵調査（雑誌記事含む）…………… URL : <http://opac.ndl.go.jp/index.html>
- ④ 国立情報学研究所（NII）の情報提供サービス…………… URL : <http://www.nii.ac.jp/service-j.html>

お知らせ

最後の定期試験を終えると、卒業はもう秒読み段階です。
これから忙しいシーズンを迎えるみなさんに図書館からお願いがあります。
図書館で借りた本は、3月19日（土）までに返却してください。
また、卒業後はOBとして図書館を利用することができます。
ご利用にあたっては2Fサービス・カウンターへお問い合わせください。

大学図書館相互利用サービスのご案内

このサービスは北海道内の大学図書館間の相互協力を更に推進して、教育・研究活動の発展に貢献することを目指すものです。それぞれの参加館ごとに学外者の利用登録を行なう必要はありますが、図書館間の相互貸借によらず、学生証・身分証明書等の提示だけで他大学学生・教職員に直接閲覧、複写、貸出のサービスを実施しています。

[サービスの内容] 閲覧、複写及び貸出

利用の詳細は受入館の利用規則によります。なお、受入館の利用規則、指示に違反した場合は図書館の利用が禁止されることがあります。

[加盟館]

旭川大学図書館、帯広畜産大学附属図書館、札幌医科大学附属図書館、札幌学院大学図書館、札幌大学図書館、天使大学図書館、東京農業大学オホーツク学術情報センター、藤女子大学図書館、北星学園大学図書館、北海学園大学附属図書館、北海道浅井学園大学図書館、北海道医療大学総合図書館、北海道工業大学図書館、北海道情報大学図書館、北海道文教大学附属図書館、酪農学園大学附属図書館、北海道教育大学附属図書館（5館）、小樽商科大学附属図書館、北海道東海大学付属図書館中央図書館、北海道東海大学付属図書館松前記念図書館（2004年12月1日現在）

[利用方法]

- このサービスに参加する大学に所属する学部学生（短大生を含む）、大学院生並びに専任教職員は、各大学の発行する学生証、身分証明書またはそれに代わる紹介状を提示して参加大学の図書館を相互に利用することができます。
- 参加大学の図書館を利用するためには、利用館ごとに図書館利用登録が必要です。受入館のカウンターに申し出て所定の手続き（学外者利用申請、学生証の提示等）を行なうことで初めて閲覧、複写及び貸出サービスを利用することができます。
- 利用にあたっては、あらかじめ受入館の開館スケジュール、資料の所蔵状況等を確認してから利用して下さい。自家用車の構内駐車はできませんので、公共交通機関を利用して下さい。
- 他大学の図書を借用する場合は、貸出期間を守り丁寧に利用し、借用人が貸し出しを受けた図書館に直接返します。なお、宅配便での返送も認められています。
- 備品及び図書館資料を汚損または忘失した時は利用者が弁償の責を負います。なお、所属館にも事故発生（長期延滞、汚損または忘失）を連絡、協力して問題の解決にあたるものとします。

図書展示企画No.42

場所 図書館1F自由閲覧室

期間 平成16年12月10日～平成17年4月30日

社会環境と地震・防災展～環境を考える本／地震・防災の本～

環境・景観工学／地震記録・耐震建築等関係資料
(分類：500 工学部所蔵分) 48冊展示中

編集後記

嗚呼、12/1発売のNIRVANAボックスセットが欲しい。「初回生産限定盤」、「未発表音源」…珠玉の宣伝文句たちが天使の顔で微笑む。だがしかし、財布はおろかATMすら、その口を堅く閉ざしたまま、私に必要な大きなお札一枚を提供してくれようとはしないのです。こんなとき、宝くじでも当たってればなあ…。

ところが、いざ宝くじで幸運を手にしても、それが元で不幸に陥ってしまう人たちは少なくないようです。せめてこの図書館だよりを手にとった皆さまにはこのようなことが起きぬよう、この場をお借りして当選者の心得3箇条をお伝えします。

- 家族（妻）には隠さず、その他の無用な口外は一切避ける。
- 当選後のプランを明確にしておく。
- 他人にお金は貸さない。

……………大好きです、とらぬ狸の皮算用。

北海学園大学附属図書館報 図書館だより 第26巻4号 (通巻172号)

本館 〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目1番1号
TEL (011) 841-1161 (本館内線) 2273・2274・2275 (工学部内線) 7813・7814 印刷所：(株) アイワード